

その時、急に麻がふり向いて「しっ」と、指を唇の前に立ててテレビの音量を上げた。

突撃リポーターが、控室の指数関数の三人のメンバーにインタビュアーを始めていた。三人は青い顔をして、ぼそぼそと答えている。

ほくは大ファンというわけではないけれど、一応このグループのことは知っている。いつもはかなり明るくて騒がしい人たちだけど、今は顔つきがちがう。

——なるほど、ではコンサート開始前には、タクトさんにはなんの異常もなかった、ということですね？

「はい。いつも通りでした」

——一曲目の途中からタクトさんの様子がおかしくなったということですが、どのような感じでしたか？ 会場の映像のほうはまだ事務所の許可が下りていないらしく見せていただけなので、リーダーのジョーさん、具体的にお願いできますか？

「いや、それもちよつと……ほくたちがどこまで言っているのか、わからないので」

キーボードケースを触りながら、リーダーが自信なさそうに言う。

——会場のみなさんからの証言も集めますので、すぐに事実が表に出ると思いますよ。ここでちゃんと説明して頂いた方が、視聴者のみなさんも納得されると思いますか？

リポーターにプッシュユされて、リーダーと残りのふたりが目を合わせてうなずきあった。

「一曲目の時は、途中から、いつものような歌い方じゃなくて、なんとなく抑揚のない感じになりました。でも、それほどひどくはなかったんで、のどでも痛いのかなと」

ベアシストが言葉を継ぐ。

「そう。一曲目のあと、ちよつと会場がざわついていたけど、タクトが水を飲んだから、ほくもののどの調子が悪いのかなと思いました。そして激しく踊りながら歌うアップテンポの二曲目に入ったんです。ところが、いつもなら聴いている人がひどく興奮するような歌い方をするタクトが、なんていうのかな、えーつと……」

ドラマーがうなずく。

「自動演奏みたいなの」

「そう、曲のミディデータがありますよね、メロディカードとか。あんな感じです。確かに音程は狂っていないんだけど……機械的というか。歌だけじゃなくて、顔も完全に無表情でした。ああ、あと踊り方もおかしくて、ただリズム通りにカクカク動いて……」

「人間に見えなかった。オレ、ビビった」

「オレも。泣きそうだった」

三人は互いの目を見て、今にも泣きそうな表情をしている。やだなあ。いつもはバリバリのロッカーなのに、こん